

尚円生誕六〇〇年 ―『球陽』にみる尚円の即位―

今 林 直 樹

二〇一五年は尚円生誕六〇〇年の記念の年であった。尚円の生誕地は沖縄本島西北部に浮かぶ伊是名島である。沖縄本島北部の本部半島にある運天から船で一時間の位置にある。

言うまでもなく、尚円は琉球王国第二尚氏王統の始祖である。琉球王国の正史の一つである『球陽』巻三には尚円の事績が数々のエピソードとともに記されている。とりわけ、尚円が即位する前、まだ金丸と名乗っていたころの「奇事」については、尚円をはじめ、琉球王統史のそれぞれの始祖とされる舜天（舜天王統）、英祖（英祖王統）、察度（察度王統）、尚巴志（第一尚氏王統）の記述との比較という点からも、興味深いものがある。本稿では、その「奇事」について簡単にまとめておきたい。なお、『球陽』に記された尚円王の生誕から即位に至るまでの記事を参考資料として掲載しておく（なお、掲載にあたっては難読な名称についてはルビを振り、必要に応じて漢字をひらがなに改め、加筆している）。

『球陽』は金丸の「奇事」について、次の五つを挙げている。

第一に、金丸が二〇歳のときに父母とともに失ったことである。当時、金丸には五歳になる弟、宣威（後の第二尚氏王統第

二代国王）がいた。金丸は生きるために農業を営んだが、その生活は甚だしく困窮したものであった。

第二に、旱魃にあつて、他の田の水が涸れても、どういうわけか、金丸の田のみは水を漫漫と湛えていたことである。

第三に、そのため、人々は金丸が水を盗んだとして、これを怨んだ島民が金丸を殺そうとしたが、金丸を殺すことができなかったことである。これがきっかけで島にいられなくなった金丸は妻と弟を連れて沖縄本島北部の国頭へと移住することとなる。

第四に、国頭に移住して数年で、伊是名島にいたときと同じようなことが起きたことである。

第五に、そのため、金丸は二七歳のときに国頭を去って首里に至り、当時、越来王子であった尚泰久（後の第一尚氏王統第六代国王）に見出され、その推薦によって「家来赤頭」という下級職に就く。尚金福（第一尚氏王統第五代国王）、尚泰久の代に順調に出世した金丸は、四五歳の時には対外貿易と那覇の行政を担当する「御物城御鎖側官」という要職に就いた。

しかし、続く尚徳は「資質敏捷にして、才力人に過ぎ、知謀自用にして賢諫を納れず、巧言非を飾り、ほしいままに良民を殺す」というありさまであった。そのため、多くの家臣が殺されたが、王の暴政を諫めた金丸だけは殺されなかった。これが第五の「奇事」である。

金丸は諫言に耳を貸そうとしない尚徳を嘆き、自領のある内間に隠遁した。やがて、尚徳が薨じた後、世子を立てようと群

臣が集まった際、白髪の老人が尚徳の治世を非難し、それに続けて次のように述べたという。

御鎖側官金丸は寛仁大度、更に兼ねるに恩徳四境に布き、民の父母たるに足る。此れ天の我が君を生ずる所なり。宜しく此の時に乗じて世子を廃し、金丸を立て、以て天人の望に順ふべし。何ぞ不可なること之れ有らんやと。

この言葉が終わらないうちに、金丸を支持する声が雷の如く響いたという。こうして、内間から迎え入れられた金丸は即位して尚円を名乗ることになるのである。『球陽』はこのことに關して、「嗚呼、天命の主に非ざれば、烏んぞ能く是の如くならんや」と記し、金丸の即位が天命であったとしている。

以上が、伊是名島出身の金丸が尚円として琉球国王に即位し、第二尚氏王統の始祖となるまでの奇事であり、概略である。

ここで、伊是名島に残る尚円関連の史跡について簡単に触れておきたい。

第一に、「みほ所」である。漢字で表記すれば「御臍所」となることからわかるとおり、ここは尚円の「臍の緒」を埋めたという言い伝えのある場所である。具体的には「大庭」の中央にある大石の下に尚円の「みほそ」が埋まっていると言われている。なお、「みほ所」の隣には「神アサギ」と呼ばれる茅葺の簡易な建物があり、そこでは神事を執り行うための準備

が行われたという。

第二に、「逆田」である。これは、先述の尚円の奇事に由来する。すなわち、旱魃の際でも金丸の田だけは水が涸れなかったという奇事である。伊是名島では、これを羨んだ島の男たちが水を自分たちの田にも流そうとして金丸の田の一部を崩したが、金丸は働き者で美男であつて島の女性たちから慕われていたため、島の女性たちは水を金丸のもとに戻し、男たちが壊したところも修復したという話が語り継がれている。なお、逆田には伊是名島での金丸を偲ばせるような歌を刻んだ歌碑が建てられている。それは次のような歌である。

北の松金が いぢきやみそ召しよち おぢゃんなし振りや
拝み欲しゃ乃

この歌は、「伊是名くとうば」では次のように記される。

にしぬまちがにが いぢちゃんすみそち うざんなしふい
や うがみぶさはあぬ

歌の意味は「北の松金（金丸のこと）が、野良仕事衣を羽織つての 賢明な働き振りや 堂々と振る舞うお姿を ぜひとも拝んで見たいものです」というものである。伊是名島での金丸の様子をうかがうことのできる歌である。

第三に、伊是名玉御殿である。伊是名玉御殿は、首里玉陵と

同じく、尚円の継嗣にして第二尚氏王統第三代国王である尚眞の治世に築かれたと言われている。

伊是名玉御殿については、二〇〇五年八月二四日から二七日にかけて本格的な調査が行われ、その詳細について、『首里城研究』No.9（特集「伊是名玉御殿調査報告」）にまとめられている（1）。同号では首里玉陵との比較考察を行った論考も掲載されているが、その一方で、犬飼公之からは、伊是名玉御殿と英祖の墓所とされる浦添ようどれに表された世界観に共通性を見出すことができるという指摘もあり、単に尚円関連の史跡というだけではなく、琉球に残る他界観といった点からも、伊是名玉御殿の今後の研究の進展が期待される。

なお、伊是名玉御殿があるのは伊是名城の麓である。伊是名城は、第一尚氏王統の尚巴志の祖父にあたる鮫川大王が築城したとされている。山頂部でも水が得られるということで難攻不落の城であったと言われている。

直接に尚円関連の史跡ではないが、島内には尚円生誕五八〇年の際に「尚円王御庭公園」と、首里に向けて力強く腕をのびて指をさす王の立像が、生誕六〇〇年にあわせては「通水節公園」内に王の乗馬像が建立されている。

（1）収録されている論文は次のとおりである。

高良倉吉、「伊是名玉御殿調査の経過」

福島 清、「伊是名玉御殿の建築調査報告」

安里 進、「伊是名玉御殿の考古学的調査」

田名真之、「伊是名玉御殿の西室厨子の銘書について」

津波古 聰・赤嶺 敏、「伊是名玉御殿石厨子の拓本について」

津波古 聰、「伊是名玉御殿 鼎型香炉について」

高良倉吉、「伊是名玉御殿の被葬者についての検討」

現在、伊是名玉御殿については、墓室内部については見ることはできないのは言うまでもないが、外部についてもアーチ門の格子を通してしか見ることはできない。福島論文では伊是名玉御殿墓室の外部と内部について、次のように記されているので、紹介しておきたい。

まず、外部についてである。

伊是名玉御殿は、伊是名グスク麓の切り立った岩山を背に立地している。正面の比較的緩い石階段を昇ると小さな平坦地があり、そこから先は踏面が手前に傾斜した急峻な石階段が続き、墓域を形成する石垣に至る。石垣の中央には石造アーチ門が開けられ、この門を中心に石垣は長さ約六・四mにわたり他より一段高く積み、門周囲は布積み、他はやや粗めのあいかた積みとしている。石垣の両翼隅は丸みを付けて山側に折れ曲がり、隅上端には緩やかにせり上がった隅頭石を載せている。石垣は正面内側の幅が約一七・二m、奥行きが約一〇mほどの規模である。墓室建物はアーチ門から向かって左手寄りの位置に北西向きに建っている。建物は全面に漆喰を塗り、屋根は切妻造で前面にわずかに軒を延ばして

いる。(八頁)

次に、内部についてである。

墓室内部の床は珊瑚礁が一面に敷き詰められ、その下には琉球石灰岩が石畳状に組まれている。壁には漆喰が塗られているが、下地には一部剥落した箇所から判断すると、外壁と同様に琉球石灰岩で積み上げられている。天井は墓室中央で桁行(短辺)方向に高さ約三二cm、幅約三七〇四九cmの棟桁状の石が渡され、そこに幅六〇cmほどの石板を片面三枚ずつ斜めに架けて山形の断面としている。天井高は最も高い棟桁石脇で二・四m、壁際で一・八mほどである。棟桁石を含む天井全体は漆喰のような白い材料で仕上げてある。墓室の床、壁、天井にはガジュマルなどに見られる木根がいたる所に延びていた。また、西室の通路部奥にはアダンの実が撒かれていた。(一五頁)

なお、墓室内部に敷き詰められた珊瑚礁について、安里論文では次のように記されている。

東室の床面は石畳敷きで、その上に枝サンゴが数センチの厚さに敷き詰められていた。枝サンゴは、玉御殿の内庭や斎場御嶽にも敷かれている。玉城朝薫の墓の漆喰にも枝サンゴが混和され、浦添市の近世墓には墓室内の汁ヒラシに枝サン

ゴを敷き詰めた事例がある。墓室内を清めるために枝サンゴが敷かれたのであろう。(三〇頁)

では、以下、『球陽』に記された、尚円の出自から即位に至るまでの記事を資料として紹介しておきたい。

球陽 卷三

尚円王

神号 かなまる あじそえすえつぎわうじんこ 金丸かなまる按司あじ添末統王そえすえつぎわうじんこ仁子(王、踐祚の次月、神の出現する有りてこの号を進む)。王、生得、徳威嚴然として竜鳳の姿・天日の表有り。並びに足下に痣有りて色黄金の如し。未だ位に即かざるの時、泊村の人大安里なる者有り。一見して曰く、この人、億兆の上に居るべしと。

附紀 尚円王伝説

尚円王金丸、生まれて賢徳有り、父を輔けて耕をなす。宣徳九年甲寅(一四三四年)、金丸年二十歳にして父母ともに喪う。時に弟、宣威は五歳なり。金丸、憂苦し、農を以て業となす。天旱に遇う毎に民田皆涸れ、金丸の田のみひとり水漫漫たる有り。人皆疑いて水を盗むとなし、常に金丸と睦みからず、あるいはまさにこれを害せんとす。金丸の言弁ずべ

きなく、正統三年戊午（一四三八年）、歳二十四のとき、ついに田園を棄て、自ら妻弟を携えて海を涉り国頭に至る。既に居ること数年、またかくのごとし。金丸心を尽くしてこれ待するも、終に容れられず。正統六年辛酉（一四四一年）、歳二十七のとき、また妻弟を携えてはじめて首里に至り、身を王叔尚泰久（時に泰久は越來王子たり）に托す。尚泰久、その居動大いに常人と異なるを見て、これを王（尚思達王の世）に薦め、はじめて家来赤頭（げんあかがみ）となる。勤職数年、同僚敬信す。景泰三年壬申（尚金福の世）（一四五二年）、歳三十八にして黄冠に陞る。後、尚泰久位に即き、景泰五年甲戌（一四五四年）、内間領主に任ず。僅かに一年を歴るに、百姓大いに服し、名世に聞ゆ。天順三年己卯（一四五九年）、歳四十五にして御物城御鎖側官（おものくさうさすばのかん）に陞り、敬以て君につかえ、信以て人を使い、賞罪理に当い、言行法るに足る。那覇四邑、その教化を受け、海外諸島に及ぶまで、感服せざるはなし。王、もとよりこれを信じ、およそ政事有れば必ず金丸を召して相議す。天順四年庚辰（一四六〇年）、王薨じ、世子尚徳立つ。資質敏捷にして、才力人に過ぎ、知謀自用にして賢諫をいれず、巧言非を飾り、ほしいままに良民を殺す。金丸進みて諫めて曰く、臣聞く、君王の道は、己を持するに徳を以てし、民を養うに仁を以てし、務めて民の父母たるにありと。今、王朝綱を廢し典法を壊ち、妄りに忠諫を防ぎ、ほしいままに無辜を殺す。父母の道たるに非ざるを恐る。伏して願わくは、広く忠諫をいれ、痛く前非をあらため、賢士を萃

げ不肖を退け、政を興し仁を施し、民をみること子の如くすれば、即ち民怨やむべく、社稷安んずべしと。王、怒りて曰く、我にしたがう者は賞し、我に逆う者は罰す。汝いづくぞあえて妄りに我を諫むるやと。袖を払い起つ。その後、王、久高に幸し、例に遵いて祭を到し、還りて与那原に至る。時に、駕に隨う者皆飢色有り。王、駕を促すに急にして酒食を給せず。金丸諫めて曰く、先王は例として久高に幸するのときは、深く臣士の飢勞をおもひ、必ずこのところにおいて酒食を賜給し、しかる後駕を起し、あらわして典例となす。乞う、暫く駕を停め、これを給せよと。王、勃然として怒色有り。群臣畏懼して言わず。金丸衣を曳き哭諫してあえて退かず。しかる後、王これに従う。これについて王、暴虐日に甚しく、金丸縷々諫むれども聴かず。成化四年戊子（一四六八年）八月初九日、金丸歳五十四、天を仰ぎて嘆息し、致仕して以て内間に隠る。明年己丑四月、王薨ず。時に当りて法司世子を立てんと欲し、すなわち、典例に遵いて群臣を闕庭に集め、この事を説き知らす。群臣皆法司の權勢を畏れ、黙して言わず。たちまち一人の老臣の鶴髪雪の如き有り、身を挺し班を出で、高声に言いて曰く、国家はすなわり万姓の国家にして一人の國家に非ず。吾、先王尚徳のなすところをみるに、暴虐無道、祖宗の功德をおもわず、臣民の艱苦を顧みず、朝綱を廢し典法を壊つ。妄りに良民を殺し、ほしいままに賢臣を誅して国人みな怨む。天変しきりに加わり自ら滅亡を招く。これ天の万民を救うところなり。幸に今、

御鎖側官金丸は寛仁大度、更に兼ねるに恩徳四境に布き、民の父母たるに足る。これまた天の我が君を生ずるところなり。よろしくこの時に乗じて世子を廃し、金丸を立て、以て天人の望にしたがうべし。何ぞ不可なることこれ有らんやと。言未だおわらざるに、満朝の臣士、声をひとしくして允諾す。その響くこと雷のごとし。貴族近臣、その変有るを見、先を争いて逃去す。王妃・乳母、世子を擁着して真玉城に隠る。兵、追いてこれを殺す。既にして群臣鳳輦竜衣を捧げ、内間に前み至りて迎接す。金丸大いに驚きて曰く、臣を以てキムを奪うは忠なるか。下を以て上に叛くは義なるか。爾等、よろしく首里に帰りて貴族賢徳の人を択びて君となすべしと。言おわり、涙流ること雨の如し。固く辞して起たず。また避けて海岸に隠る。群臣追従し、言を極め力めて請う。金丸、やむを得ず、天を仰ぎて大いに嘆じ、ついに野服を脱ぎて竜衣を着し、首里に至りて大位を踐む。しかして中山、万世王統の基を開く。後、その岸を名づけて脱衣岩（俗にその岩を呼びて脱御衣世という）という。かつ西原間切嘉手苅村のいわゆる内間御殿は、すなわち金丸の旧宅なり。今、皆存す。

附 尚円王未だ位に即かざるの前屢々奇事有り。

尚円王未だ位に即かざるの前、屢々奇事有り。王、年二十歳にして一時に父母を失い、孤窮甚だ極まる。これ一の奇事なり。民田旱涸するも、王田水盈つ。これ一の奇事なり。島民

嫉忌し、屢々これを殺さんと欲す。王、孤窮といえどもついに害を加うる能わず。これ一の奇事なり。国頭に至るもまたかくの如し。これ一の奇事なり。仕を尚徳の朝に受くる者、多く殺戮せらるるも、王のみひとり屢々諫めて殺害せられず。これ一の奇事なり。嗚呼、天命の主にあらざれば、いずくんぞよくこの如くならんや。